

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530771

研究課題名(和文) 教育テクノロジー(視聴覚教育, 教育工学)を専門とする教師のライフ・ヒストリー研究

研究課題名(英文) Life history study of technology specialist teachers

研究代表者

大谷 尚 (OTANI TAKASHI)

名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授

研究者番号：50128162

研究成果の概要(和文)：教育テクノロジー(視聴覚教育、教育工学)を専門とする教師のライフ・ヒストリーインタビューを日本とカナダの両国で行い、それを分析した。その結果、教育テクノロジーについての教師の認識とその形成過程、そのような認識の教師の教育実践への影響、教育テクノロジーの活用の問題となる要因とその解決方法、これらについてのカナダの教師と日本の教師との共通性と差異性、が明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：Life-story interviews with technology (audio-visual education, educational technology) specialist teachers were conducted both in Japan and Canada. The results were analyzed to find teachers' cognitions on educational technologies and its process of building, such cognitions' impacts on their educational practices, negative factors of educational technology uses and their solutions, and differences between Japanese and Canadian teachers on above mentioned points.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：教師・生徒文化、ライフ・ヒストリー、教師研究、質的研究、テクノロジー

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本では、戦後の視聴覚教育の流れに加わって 1960 年代以降、教育工学が急速に盛んになり、「教育方法の最適化」(東 1967)、「教育の効率化」(坂元 1968)、「教授学習過程の最適化」(井上 1971)等の指導的な概念が提出された。その後、多様な教育テクノロジーが開発、研究されてきた。最近では、社会の情報化に呼応して、視聴覚教育と教育工学の研究は隆盛を極めていく。

しかし教育テクノロジーの多くは、教師からの requirement/needs pull ではなく、開発

者からの technology/seeds push で開発導入される。そのため世界的に見ても設置率は高いが利用率が低い現状がある(Cuban 2003)。さらに本来の趣旨や機能やメリットを無化した使いかたがしばしばなされる。たとえば個別学習のためのテクノロジーが一斉授業の中に押し込められて利用される(大谷 2003a)。これについて Cuban(1986)は、教室や学校にテクノロジーが入る際、教師が門番 gatekeeper の役割を担うと論じている。また教師は導入を妨げるだけでなく、その機能を意図的・無意図的に変更し、本来の機能を殺した形で使用することもある(大谷 2003a)。

またもちろん、教師の不理解によって、テクノロジー先行の不適切な教育実践もしばしば行われている。そのため、教育テクノロジーを検討するためには、なによりも教師についての理解が必要である。しかしこのような研究は従来十分ではなかった。とくに、個々の教師が、個人的、具体的、主観的に、また教師集団として間個人的 *interpersonally* に、また間主観的 *intersubjectively* に、教育テクノロジーをどう把握しているのかについての研究がなされておらず、そのような知見がまったくない。そこで、教師が教育テクノロジーをどう認識しているか、その認識がどのように形成され、どのように変化しながら発達し、その教師や教師集団の教育実践にどのような影響を与えているかを解明する必要があると考えた。

(2) 国内ではライフ・ストーリー研究は多いが、教師を対象とするものは極めて少なく、櫻井(1992)や塚田(2002)などに限られる。教育工学に関わる研究でライフ・ストーリーを扱っているものには木原俊行(1992, 1997)があるが、これらは教育テクノロジーを専門とする教師を対象としたものではなく、本テーマに関わるものは研究代表者による大谷(2004a)と Otani(2005b)のみである。

いっぽう欧米では、教師に関するライフ・ストーリー研究が数多く存在する。まず教師のライフ・ストーリーの手法や意義などについて、Woods(1985), Ball & Goodson(1985), Goodson(1992)などがある。また、教師の職能発達 *professional development* については、Huberman(1989)や Goodson & Hargreaves (1996)などがある。特定のカテゴリーの教師を対象としたものとしては、女性教師についての研究が比較的多く、Casey(1993), Middleton, (1993) などがある。ただし、テクノロジーに関わるものはわずかしかなく、Hansen & Davies (1998)がテクノロジー教師を扱っているが、欧米の *technology teacher* は、かならずしも教育工学専門家ではなく、彼らは日本でいえば主に技術・家庭科の教師である。また、Hughes (2003)も教師のテクノロジー利用をライフ・ストーリーで扱っているが、対象はテクノロジーを専門とする教師ではない。

2. 研究の目的

本研究は、次のことを目的とした。

「教師にとって教育テクノロジーとは何かについて、その多様性と共通性を、とくに教育工学(視聴覚教育、情報教育を含む)を専門とする教師のライフ・ストーリーを分析することで解明すること」。具体的には、以下のような下位の研究目的を達成することで、

上記の目的を達成する。

a. 教師とテクノロジーとの出会いの分析

教師はテクノロジーといつ(教員養成前、教員養成中、在職中…)どのように(偶然に、研修等で…)出会うのか? その出会いのあり方はその後のテクノロジー利用にどう影響するのか?

b. 教師が自分の教育実践にテクノロジーを採用する契機についての分析

教師は出会ったテクノロジーをどのような契機(きっかけ)で(自分の実践の行き詰まりを克服するため、自分の実践を一層効果的にするため…)自らの教育実践に採用するようになるのか?

c. 教師がテクノロジー利用を発展させるプロセスの分析

教師は、テクノロジー利用をどのように発展させるか? そこではどのような研修・研究の機会や研修・研究グループとの関係があるか? また教師本人のどのような教育的問題や課題を背景としているか? それらを通して、教師のテクノロジーに関する認識はどう発展し、またどう変化するか?

d. 教師のテクノロジー利用とその他の要因との間の相互作用の分析

教師のどのような教育観(教材観、児童・生徒観、授業観、教授・学習観、教職観…)が、テクノロジー利用にどのような(肯定的、否定的…)影響を与えるか、また逆にテクノロジー利用は、教師の教育観にどのような影響を与えるか? つまりそれらの相互作用はどうであるか?

e. 教師による教育テクノロジーの総合的なイメージと問題・課題意識と期待の分析

総合して、教師は教育テクノロジーにどのようなイメージを持っているか? また教育テクノロジーに感じている問題、課題はどのようなものであるか? さらに教育テクノロジーにどのような期待を抱いているか? これらの多様性と共通性を分析する。

3. 研究の方法

研究手法: ライフ・ストーリー・インタビュー

本研究では、その目的の達成を、主にライフ・ストーリー・インタビューとその分析によって行う。「ライフ・ストーリー」とは、一般に、口述された語り手の生活や人生を聞き手がまとめて論考を加えたものであり、語り手の言葉によって個人の主観的な意味やアイデンティティを取り上げ、語り手の人生とともに、語り手を取り巻く状況の変化を解明しようとするものである(櫻井 2002)。今回の研究では、教師が日常的に有しているにもかかわらず、日頃は言語化したことのない、

教育テクノロジーについての潜在的で主観的な意識を分析するためにこの方法を採用した。

研究対象：教育学（視聴覚教育、情報教育を含む）を専門とする教師

対象は、視聴覚教育、教育学、情報教育など、教育テクノロジーを専門とする教師である。一般の教師のテクノロジーに関する語りは「薄」く、分析対象にならないことがこれまでの研究でわかっているため、本研究では教育テクノロジーに経験と蓄積を有する教育学等の専門の教師を対象とする。一般の教師のテクノロジーに対する意識、態度等は、これらの教育学の専門教師の「厚」い語りを通して分析する。

具体的には次のような教師である。

①校務分掌で教育学（視聴覚教育、情報教育を含む）を担当してきた教師

②教育学（視聴覚教育、情報教育を含む）を専門とし指導員や指導主事を経験してきた教師

③情報教育関係の大きなプロジェクト（100校プロジェクト等）に参加した教師

なお、インタビューに多様性を与えて研究の客観性を保持するため、多様なカテゴリーの教師を理論的サンプリング **theoretical sampling** によって選択した。それはたとえば、養成課程の違い（教員養成系／非教員養成系）、校種、教科、性別、年齢と世代、現職／退職、教育学の専門（視聴覚／情報教）の違い、指導主事等の経験の有無等である。また国際比較を行うために、カナダの教師のインタビューも行った。カナダでは、申請者はすでに同様な調査を始めており、それが継続できる。なお、インタビューの依頼は、理論的サンプリングの他、インタビューを経験した教師からさらに他の教師の紹介を受けるスノウボール・サンプリング **snowball sampling** も行った。

4. 研究成果

以下の点が明らかになった。

①教育テクノロジーについての教師の認識とその形成過程。

②そのような認識の教師の教育実践への影響。

③教育テクノロジーの活用の問題となる要因とそれを考慮した適切な活用の促進方法。

④教師の教育的な現実に即した教育的な教育テクノロジーの開発のための情報。

⑤教育テクノロジー研究に由来不足していた教師に関する研究知見。

⑥上記についてのカナダの教師と日本の教師との共通性と差異性

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

【雑誌論文】（計9件）

①Takuya Saiki, Kei Mukohara, Takashi Otani, Nobutaro Ban、Can Japanese students embrace learner-centred methods for teaching medical interviewing skills?、*Medical Teacher: International Journal of Medical Education*、査読有、33(2)、69-74,2011

②浜田久之、シエリー・リー、アバス・ガバンラスル、近藤久義、江崎宏典、大谷 尚、ヘレン・P・パティ Objective structured teaching evaluation の実施と分析、*医学教育*、査読有、2010、41(5)、325-335

③Takashi Otani、Smiles of Gods: Japanese Schoolteachers' Interpersonal Metamorphosis of Technologies into Pre-technological Instructional Settings、*Proceedings of World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia and Telecommunications*、巻無、査読有、2010、2234-2239

④大谷 尚、情意的な内容の大切さと放送教材・映像教材の力の見直し、*視聴覚教育*、Vol.750、4-5,2009,査読無

⑤大谷 尚、医学教育修士プログラムについて—トロント大学の医学教育学修士課程の紹介と教育学の立場からの検討—、*医学教育*、査読有、Vol. 40、2009、255-258

⑥ Hiroshi Nishigori, Takashi Otani, Minako Uchino, Simon Plint and Nobutaro Ban (2008) I came, I saw, I reflected: a qualitative study into learning outcomes of international electives for Japanese and British medical students, *Medical Teacher: International Journal of Medical Education*, 査読有、2009; 31(5), 196-201

⑦長谷川元洋・大嶽達哉・大谷 尚、ネットいじめの問題に対する学校の法的権限についての検討、*情報ネットワーク・ローレビュー*、査読有、Vol. 8、2009、86-97

⑧長谷川元洋、大嶽達哉、大谷 尚、ネットいじめに対する教師の対応の教育的・法的问题の解明と課題の検討—ある公立中学校での事例を手がかりに、*情報ネットワーク・ローレビュー*、査読有、Vol. 7、2008、104-113

⑨大谷 尚、質的研究とは何か—教育テクノロジー研究のいっそうの拡張をめざして、*教育システム情報学会誌*、査読有、Vol. 25、2008、340-354

(3) 連携研究者 なし

〔学会発表〕(計9件)

- ①平山陽子、大谷 尚、終末期医療と事前指示書に対する地域住民の意識について、第1回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会、2010.6.27、東京国際フォーラム
- ②大谷 尚、6年制薬学教育におけるコミュニケーション教育に必要な質的アプローチと教育学的知見、日本薬学会第130回年会、2010.3.30、岡山市
- ③高木彰子、大谷 尚、勝野順子、白神 誠、井手口直子、在宅医療に参入した薬剤師のキャリア開発に関する質的研究、日本薬学会第130回年会、2010.3.28、岡山市
- ④大谷 尚、教育システムの包括的な評価と教育テクノロジー研究による教育の評価-豊かなモザイクの実現をめざして-、日本教育工学会第25回全国大会、2009.9.19、東京大学
- ⑤坂本将暢、柴田好章、大谷 尚、的場正美、子どもの発言を手がかりとした授業研究の検討-授業研究のツール開発のための調査-、日本教育工学会第25回全国大会、2009.9.21、東京大学
- ⑥大谷 尚、質的研究とは何か-医学教育研究におけるその可能性-、日本医学教育学会、招待公演、2009.7.25、近畿大学
- ⑦坂本将暢・大谷 尚、メーリングリストの対話記録に表れた協調的な質的研究の過程の分析、日本教育工学会第24回全国大会、2008.10.12、上越教育大学
- ⑧長谷川元洋・大嶽達哉・大谷 尚、学校の事情に合わせて情報セキュリティと個人情報保護のルールを策定することの問題点、日本教育工学会第24回全国大会、2008.10.11、上越教育大学
- ⑨浜田久之・江崎宏典・大谷 尚・近藤久義・ヘレン・バティアー、OSTE: Objective structured teaching evaluations 指導医の教え方は評価できるのか?、第40回日本医学教育学会大会、2008.7.26、東京医科大学

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~otani/scat/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大谷 尚 (OTANI TAKASHI)
名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授
研究者番号：50128162

(2) 研究分担者 なし